

辺野古通信

第36号 2013年5月10日



4/24 横浜集会



4/28 東京シンポ

発行: 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座(沖縄講座@横浜)
沖縄講座 HP <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>

4.28 「主権回復の日」 糾弾！ 沖縄・東京で抗議行動展開

■4.28「主権回復の日」政府式典に抗議する集会とデモ、シンポジウムが沖縄や東京をはじめ全国各地で展開された。沖縄の「屈辱の日」大会は1万人結集(2頁)。同時刻に日比谷で開かれた一坪反戦地主会関東ブロック主催の抗議集会には400人が会場から溢れた。■「県外移設」方針を堅持する自民党沖縄県連へ政府自民党からの圧力が強まっている。4月3日に訪沖した菅官房長官は仲井真知事と会談した後、空港で翁長県連会長、照屋幹事長と面会。6日の県連大会は方針堅持を確認したが、22日に県選出の島尻政務官が3月の西銘衆議院議員に続いて県内移設容認を表明した。25日に党本部に県連幹部を呼び寄せた石破幹事長は連休明けにも訪沖を予定。■5日公表された嘉手納以南の米軍施設区域の返還計画は、1048ha余りの内無条件返還はわずか55ha、普天間返還は「2022年度またはそれ以降」(つまり9年間は返還しない、それ以降も返還時期は不明)というふざけたもの。普天間との「パッケージ」を否定した昨年の日米合意よりも後退した「砂上の返還計画」(4/7 沖縄タイムス)だ。18日には朝鮮半島情勢を口実にPAC3の沖縄常時配備を強行し、30日の日米防衛相会談で辺野古移

設推進と共に、今夏にオスプレイ12機の普天間追加配備を確認した。■「波よ鎮まれ」という国境の島々の願いを尻目に、安倍内閣は領土ナショナリズムを掻き立て、南西諸島への介入を強めている。3月の義家文科省政務官の派遣に続いて、「教科書に育鵬社版を使うように」という県教育庁を通じた竹富町への「指導」に、町民の会は3日に抗議集会。陸自沿岸監視部隊配備の策動も続いている。「八重山から風穴を開けて揺さぶり、沖縄の反基地反戦世論を切り崩すのが安倍内閣の狙い」と大田静男さんは4.28 東京シンポで訴えた。(3・4頁)■オスプレイ配備拒否！低空飛行訓練を許さない4.24 横浜集会は約160人の参加で大盛況。講師の山城博治さんと「沖縄に返せ！」の大合唱。■県央共闘会議第14回定期総会記念講演は沖縄タイムスの渡辺豪記者が講師。政府による戦後一貫した軍事植民地化政策という国策に抗う沖縄の自治体・住民を追い、3.11以降は「福島と沖縄」の「犠牲のシステム」、そして「領土ナショナリズム」に翻弄される国境の島を取材する。参加を！
■辺野古・高江カンパは累計1,383,048円(5月07日現在)。引続きカンパを！
郵便 00210-0-2021 沖縄連続講座

沖縄タイムス・渡辺豪記者が語る-国策に抗う島・沖縄からの報告

5月25日(土) 15時

会場 大和市生涯学習センター(相鉄線・小田急江ノ島線大和駅10分)

講師の渡辺豪さんは沖縄タイムス論説委員。著書に『「アメとムチ」の構図』『国策のまちおこし』『この国はどこで間違えたのか-沖縄と福島から見た日本』『波よ鎮まれ~尖閣への視座』(WEB新書)等

主催 基地撤去をめざす県央共闘会議



4・28

政府式典に抗議する沖縄大会に10000人超参加!



それは異様な光景だ。「厳かな雰囲気」に包まれた式典が終わり、天皇皇后両陛下が退席しようとする中、突然、不規則発言が響いた。「天皇陛下、万歳！」一人の出席者が大声を上げると、臨席した国会議員らの約3分の1が一齐に「万歳」と続き、式次第になかった万歳三唱が会場にこだました。(4/29 琉球新報) ネット上に流れている写真を見ると、まるで発声を予期していたかのように安倍首相がしっかりと両手を挙げて呼応したのが確認できる(写真左隅)。

安倍のスピーチの全文も琉球新報に掲載されている。確かに沖縄への言及が数行あるが、アジアへの侵略戦争にはまったく触れず、「日本が、自分たちの力によって、再び歩み始めた日」「主権を取り戻し、日本を、日本人自身のものとした日」を強調し、天皇ヒロヒトの詠んだ歌

を紹介している。

沖縄からの猛反発や都道府県知事や国会議員の大量欠席にも関わらず、「戦後レジームからの脱却」をめざす安倍9条改憲内閣にとって、「主権回復の日」式典は強行されねばならなかった。周辺アジア諸国はいうまでもなく、敗戦国日本の庇護者であった、そして現在もあり続けている米国の不評を買うことになろうとも。「戦後の敗北と征服から新たな章をめくりたい」と安倍首相らの欲望を象徴している(4/8 沖縄タイムス)。

安倍首相が憲政記念会館で空疎なスピーチを読み上げているころ、沖縄では1万人が式典に抗議の声をあげた。



安倍内閣は、サンフランシスコ講和条約が発効した4月28日を「主権回復の日」として、政府主催の式典を本日開催している。われわれは、政府式典に抗議するため怒りを持ってここに結集した。

沖縄県議会は去る3月29日、「4・28『主権回復・国際社会復帰を記念する式典』に対する抗議決議」を全会一致で可決した。県内市町村でも抗議決議が次々と可決され、全国でも式典に抗議し、中止を求める声があがっている。

1952年4月28日発効したサンフランシスコ講和条約によって、沖縄、奄美、小笠原は日本から切り離され、米軍占領下に置かれた。また、同日発効された日米安保条約によって日本には米軍基地が存続することになった。

米軍占領下の27年間、沖縄では、銃剣とブルドーザーによる強制接収で米軍基地が拡大され、県民には日本国憲法が適用されず、基本的人権や諸権利が奪われ、幾多の残虐非道な米兵犯罪によって人間としての尊厳が踏みにじられてきた。

ゆえに4・28は、沖縄県民にとって「屈辱の日」にほかならない。

1972年の復帰以降も県民が求めた基地のない平和で豊かな沖縄の現実にはほど

遠く、今日なお、国土面積の0.6%の沖縄に在日米軍専用施設の74%が居座っている。米兵による事件事故や爆音などの基地被害によって県民の平和的生存権、基本的人権は著しく侵害されている。

県知事、県議会、41市町村の長と議会議長の県民総意の反対を押し切って、昨年、普天間基地に欠陥機オスプレイが強行配備された。さらなる追加配備、嘉手納基地への配備計画の浮上、辺野古新基地建設手続きの強行など、県民総意を否定するこの国のありようは果たして民主主義といえるのか。国民主権国家としての日本の在り方が問われている。

この現状の中、沖縄が切り捨てられた「屈辱の日」に、「主権回復の日」としての政府式典を開催することは、沖縄県民の心を踏みにじり、再び、沖縄切り捨てを行うものであり、到底許されるものではない。

よって、われわれ沖縄県民は政府式典に「がっつていんならん」との憤りをもって、強く抗議する。

以上、決議する。

2013年4月28日
4・28政府式典に抗議する「屈辱の日」
沖縄大会

4.28 東京シンポジウム「サンフランシスコ講和条約60+1年」に約200人参加



4月28日18時、文京区民センターで「主権回復の日」政府式典糾弾! 4.28 東京シンポジウム「サンフランシスコ講和条約60+1年」が開催された。昼の集会・デモの参加者も含めて約200人が会場を埋めた。事前に沖縄タイムスと琉球新報から当日付の号外が持ち込まれて配布された。

アジアの視点から〈沖縄と日本〉を考える

まず実行委員会からシンポの趣旨が説明された。本シンポジウムは、サンフランシスコ講和条約から61年目を迎えるこの時に、日本と沖縄の関係はどうなっているのか。単に〈日本と沖縄〉という関係だけではなく、アジアの近現代史を見据えて、台湾、中国、韓国、朝鮮、そして沖縄、日本というグローバルな視点から、もう一度日本と沖縄の関係を考えてみよう。そんな問題意識から企画された。この前史としては、2008年に那覇市内にて開催された「来るべき自己決定権のために」というシンポジウムがある。そこで、復帰運動の高揚期に反復帰論を唱えた新川明さんとか、川満信一さん等をパネラーに、反復帰論の思想的資源をどう受け止めるのか議論された。「沖縄の自己決定権」に対して、我々はどう応えるのか。昨年9月に10万余の県民大会があり、そして10月1日のオスプレイ配備強行の前日までに、普天間基地の全ゲートを封鎖するという画期的な闘争を四日間にわたってやりぬいた。こういう沖縄の闘いを、我々はどう受け止め応えていくのか。実践的な場面、政治思想的な営為も含めて考えよう。そんな議論を実行委で積み重ねてきた。

南の島から沖縄を揺さぶるのが狙い(大田)

シンポジウムのコーディネーターは、ジャーナ

リストの二木啓孝さん。



「八重山戦後史」「八重山の戦争」の著者・大田静男さんは、「石垣島から見た、安倍政権の姿を話してみたい」「『主権回復の日』は、笑う以外にない。」と切り出した。そして琉球処分翌年1880年に明治政府が八重山・宮古を清国に割譲して条約改定を有利に進めようと清国に提案した「分島案」、敗戦間近、近衛文麿を天皇の特使としてソ連に派遣し沖縄・小笠原・樺太・千島(北半分)を放棄する和平条件案を決定したこと、「天皇メッセージ」(国体護持のため沖縄の長期占領をマッカーサーに申し出)など、沖縄が天皇と日本国家にとっていつでも放棄できる対象でしかなかったことを指摘、「天皇にとって、天皇制を守ることができれば、国民や領土はどうでもよいとされた。『売国奴』『非国民』は天皇とそれを支持してきた保守勢力ではないか。」と喝破した。

また、陸上自衛隊沿岸監視部隊の八重山配備計画、教科書問題で郁鵬社の教科書採用を迫る文科省の介入や尖閣問題に触れ、「南の島の弱い部分に集中的に介入して風穴をあけ、沖縄の反基地世論を揺さぶり、『一枚岩』を崩そうというのが、安倍政権の狙い。」と指摘、「沖縄本島の基地問題だけでなく、南の島の動向にも目を凝らして欲しい」「私たちは憲法改正は許さない。許したら私たちの基本的人権も犯され、基地が固定化され、反対運動は弾圧される。そうならないよう八重山から声を上げ続ける」と結んだ。

山城博治さんからビデオメッセージ

ここで沖縄で開催される抗議大会へ参加するため、シンポに來れなくなった沖縄平和運動センターの山城博治さんのビデオメッセージ上映。9分間の短い編集だが、高江や普天間など、いつも沖縄の闘いの最前線で活躍する山城さんの姿を映し出した。



日本をどうするか観点で連帯を(安次富)

名護・ヘリ基地反対協共同代表の安次富浩さんが「本日、宜野湾海浜公園の政府式典抗議大会に1万人が結集、会場から人が溢れ出し大成功だった！」



と報告すると会場から大きな拍手。安次富さんは、政府式典に26人の知事しか参加していないことに触れ、「こんな政府式典が開催され、日本のマスコミが何の問題も指摘できないところに現在の危険な状況がある」と指摘。尖閣問題で国境の緊張の原因を作った石原元都知事を批判し「東京都民はなぜ怒らないのか」「国境を国有化して防衛するということは何かあれば戦闘行為になる。国境線は、経済権益を共同で管理するという発想が必要。国境で黒潮はUターンするか？ 渡り鳥は？ 魚は？ 雲は？ 地域同士で話し合っ共同水域として使えば何の問題もない。地下資源も共同で開発し利益を分配すればいい。こういう柔軟な発想がなぜ出てこないのか。すぐ戦争に繋がるような発想しかない。」と政治家の無責任な発想を批判した。またこれからの闘いについて、「沖縄は米国の植民地支配の中で『民族自決権の行使』として日本復帰を選択した。日本政府から見れば第二次再併合だが、我々からすれば復帰を選択した。しかし、将来を見据えれば日本からの分離を選択する権利は私たちにある。」と「自決権を持ち、単なる一県の枠ではない琉球自治州」を提起。最後に「沖縄の問題は自己決定権の行使として、私たちの闘いの中で解決していく。みなさんの支援は、日本をどうするかという観点からの沖縄との連帯運動。日本をどうするかという視点で沖縄と連帯を」と呼びかけた。

狙いは「人民からの主権回収」(武藤)

「戦後日本国家という問題」など多数の著書があるピーブルズプラン研究所の武藤一羊さんは、学生だった61年前の4.28当日の集会で全学連が掲げた横断幕に「弔国恥講和発効」と書かれていたことを回想し、講和条約が発効してから日本の中の反基地運動



が盛り上がり、その政治的緊張を沖縄に基地を移すことで解消したことを指摘。さらに戦後日本国家を支える三つの原理、アメリカ原理・平和民主主義原理・帝国継承原理の内、安倍内閣が帝国継承原理を本気で実現しようとしている「とんでも政権」であることに注意を喚起。「主権回復の日」に込められた意図が、「アメリカからの主権回復」ではなく、人民からの主権回収にあると強調した。さらに、「沖縄の闘いを『支援する』ことが我々の間に染み付いている。それはもちろん大事だが、沖縄との関係、アメリカとの関係、中国との関係をどうするか。そこが問われている」「日本は最前線基地・沖縄と直結している。安保条約で米軍とも直結している。その米軍はアジアで手荒な戦争をしている。国内の平和と外での手荒な戦争が背中合わせで結びついていて、顔は見えない。そんな風に形成された日本国の内部意識に依拠した平和運動だった」と、戦後日本の平和運動の弱さを指摘。「沖縄は震ヶ関に進駐し、安次富さんの言うように自決権を行使している。これはある意味で大きなチャンス」と結んだ。

安倍政権を撃つ方策はあると感じた(二木)

シンポの最後に、コーディネーターの二木啓孝さんが「これは逆説的な言い方だが、安倍政権ができてよかった。改憲も国防軍も主権回復の日もTPPも、全部露骨に出てきた。対象の輪郭がはっきりした。だからこそ、こちらも構えなければいけない。三人のお話を聞いて、まだまだこれを撃つ方策はあると感じた」と締め括った。



会場からは、日韓連帯運動、沖縄一坪反戦地主会関東ブロック、脱原発産産省テント村などから報告と提起、アピールがあった。

昨年からのシンポの日程を4.28に定め準備を進める中で、「主権回復の日」騒動(3/12閣議決定)があり、にわかに61年前の4.28が政治焦点として急浮上、マスコミでも大きく取り上げられた。結果として、東アジアの歴史的空間的パースペクティブの中に〈日本と沖縄〉の現在を捉え返すという点では議論が深まったとは言えない。5.18沖縄シンポジウムでの議論の深まりを期待したい。

〈沖縄〉を創る、〈アジア〉を繋ぐ〜「復帰」40+1年とサンフランシスコ講和条約60+1年

発言Ⅰ 東アジア関係のなかの日本と沖縄
発言Ⅱ 「尖閣」と「釣魚」のあいだで
発言Ⅲ 八重山の波濤
発言Ⅳ 沖縄の自立の思想的拠点

李 鍾元(早稲田大学教授、国際政治)
丸川哲史(明治大学教授、東アジア文化論)
大田静男(八重山郷土史家)
仲里 効(映像批評家)

コーディネーター：長元朝浩(沖縄タイムス論説委員長)

■と き：5月18日(土) 午後2時～5時 ■ところ：沖縄県自治会館 資料代：500円

■主 催：5月沖縄シンポ実行委員会 098-863-3523 (那覇市内)

終わらない占領と植民地主義から始まりのアジアへ、歴史意識の深層の扉をこじ開け、新たなる〈アジア・沖縄〉の思想は生まれなければならない。ここ沖縄から。(チラシから)